

やぎさん郵便に寄せて（岡田文弘初期詩篇 2）

岡田文弘第二詩集
やぎさん郵便に
寄せて



スーザンの唄

ひとなみの幸せ

ひとなみの幸せ、零れ落ちてしまいそうな
ひとなみの幸せ、てーぶるの傍らに置かれた
ひとなみの幸せ、僕の指の間をすりぬけて
ひとなみの幸せ、海へと弧を描いていった

愛する人の名を呼び
かの女のために詩をひとつ書く
こーひーの香りに溺れ
国道沿いに目をやれば
今年いちばんのかわいい風たちが
街をいろどりながら駆けてゆくけど

ひとなみの幸せ、でも僕ってひとなみ以下
ひとなみの幸せ、でもひとなみってなんだろう

わらい転げ、はしり続け
いつしか僕を夕陽が照らしてる
なにげない都市のまん中で
一千万の幸せのカタチが飛ぶ
ものがたりは続く ガラスの野道の上
きみ達をさらってく春先の笛吹きたち

ひとなみの幸せ、信じる力はおそろしい
ひとなみの幸せ、僕に言わせりゃオワライグサ

ひとなみの幸せ、零れ落ちてしまいそうな
ひとなみの幸せ、てーぶるの傍らに置かれた
ひとなみの幸せ、僕の指の間をすりぬけて
ひとなみの幸せ、海へと弧を描いていった

ぼくの屋根裏部屋

ぼくの屋根裏部屋、さぁ入ってみなよ
バイキング号のボトルキャップ、ほんもののルビーのカケラ
剣を腰にさしたくるみ割り人形たち
ぼくの屋根裏部屋、さぁ入ってみなよ
くもの巣をまとったフリコ時計、ナポレオンのぼうし
おじいさんがしとめた鹿の毛皮
ぼくの屋根裏部屋、さぁ入ってみなよ
よくわからないカビたちに、ひびの入ったチェス盤に
エースの抜けたトランプがいっぱい
ぼくの屋根裏部屋、さぁ入ってみなよ
何年前かのカレンダー、子どもの頃の雑誌の付録
とうさんがうつしたぼくの写真

みんな屋根裏部屋をもってるのさ
でもかぎをなくしちゃうのさ

ぼくの屋根裏部屋
ぼくの屋根裏部屋

ツマラナイナイ・ゼネレーション

コーンフレークぶちまけちゃった、そうさ時間が足りないのさ
家でも通りでもわめいてる つまらぬやつ等のつまらないうた
おまえはぼくに興味がなくて ぼくはおまえにいらついている
エンストおこしたでかいくるまを 押してとぼとぼ歩いてるみたいさ

つまらない世界、つまらない国、つまらぬ話につまらぬ人々
つまらない日々、つまらない場所、つまらぬおまえにつまらぬぼく

そして結局まだ家のなかさ 何の展望もないからね
職安へ行ったとしてもどうにかなるわけでもないし
おまえは言うさ、退屈だわと、あんたはほんとにつまらないと
そのせりふ そっくりおまえに返してやるよ Go Away!

つまらない今日、つまらない明日、つまらぬブームにつまらぬ社会
つまらない愛、つまらない恋、つまらぬ想いにつまらぬキス
つまらない家、つまらない街、つまらぬ娯楽につまらぬ教養
つまらない未来、つまらない夢、つまらぬ希望につまらぬ展望

つまらない上におわらない、おわらない上にくだらない
くだらない上にやるせない、やるせない上にあじけない
あじけない上にいみがない、いみがない上にしょうむない
しょうむない上にやる気ない、やる気ない上につまらない!!

ツマラナイナイ・エモーション!
ツマラナイナイ・ハイテンション!
ツマラナイナイ・レボリューション!
ツマラナイナイ・ニューファッション!
ツマラナイナイ・センセーション!
ツマラナイナイ・ヴァイブレーション!
ツマラナイナイ・モチベーション!
ツマラナイナイ・ゼネレーション!

リターン・トゥー・ザ・マウンテン

ここを引き払って山へでも行こうかと思う
いまいまいあれやこれやから解放されて
ふるくさい格好をしていても後ろ指をさされない
耳をふさがずとも静かなところへと
マヤカシで満たされた街に未来は探せない
ましてマヤカシで誰かを愛するなんて

リターン 帰ることは逃げるのではなく
自分へむけての道を開くこと

土をほり返し食べるものを作りたい
雨に向かって顔をむけ渴きを忘れた
今日いちにちまた生き延びたのだとわからぬまま
からだのシンが腐って死にたくない
そしていつか君がぼくに向けたあざけりの笑顔を
許せるような心を持ちたいんだ

リターン 帰ることは逃げるのではなく
自分へむけての道を開くこと

いつか君と走った月の下の麦畑
秋の風はこちよく僕らはイノセントだった
幸せは過ぎ去ってから認識される
そして君は変わり果て僕は疲れ果てた
目の前に広がるもの、足の下へ広がるもの
もう一度僕は生きることを信じたい

リターン 帰ることは逃げるのではなく
自分へむけての道を開くこと
リターン 帰ることは逃げるのではなく
自分へむけての道を開くこと！

ドゥー・ハー・ベスト

君が朝食をかきこんでいる
春の花びらのような唇からミルクがしたたっている
コーンフレークは乾いた声でやかましくまくし立て
トーストが飛び出せば、ママがそいつをキャッチする
新聞とコーヒー、それからせわしない時計
テレビに映し出された今日いちにちの天気就いて
目が覚めたところで巨大な虫になるわけではなく
カレンダーが一枚やぶられただけのこと
オー・ハニー、あくびが止まらないね
オー・ハニー、ずっとこんな調子かい？

君がバスからひらりと降り立つ
それが最高と思えるしぐさで、髪をゆらしてみる
少しよそよそしい世間話に花咲き乱れ
先生の目を盗んではつかのまのおねむね
心のどこかを引っばっている週末の計画
友だちに冷やかされても君はいい気分さ
明るさではちきれそうにのびをひとつして
ベルが鳴る前までにノートをうつそうとしている
オー・ハニー、クッキーをもうひと皿頼む
オー・ハニー、なんだか笑えるはなしじゃないか

いつだってそうさ、いつだってそうだ
どこからともなく、なにがどうもなく
カンシン事は成績と恋に就いて
そしてちょっとしたなにげなサで今日を作る

オー・ハニー、それが最高なのかい？

エベレスト姉さん

エベレスト姉さん、エベレスト姉さん。おれをしかるのはやめてくれ。あんたはおれのおふくろでもないし、こい人でもない。あんたはおれを正さなくちゃならねえってことはないし、おれはあんたに正されなくちゃならねえってこともないんだから。そのかっこいい黒ぶちメガネをヒクヒクさせるのはやめてさ、な、愉快に生きていこうじゃないか。なあ、エベレスト姉さんよ。エベレスト・姉さんよ。

足の生えた魚のブルース

足の生えた魚、ぴょこぴょこ道を歩いてる。なんて素敵な光景なんだ。足の生えた魚、ジュークボックスのミュージックに合わせて踊ってるよ。

でもあのがきんちょはそいつを踏み潰しちまったのさ。だから、足の生えた魚はもういない。がきんちょも、おとなになって職を探して町を出て行った。あとには、何にも無い。

サッド・コント・フォーエバー

昔 家の裏に井戸があった
どれくらい深いかわからなかった
あんなに水があふれていたのに
永遠にあふれていると思ったのに

昔 笑顔だったきみと出会った
どれくらい夢中になったか言いあらわせなかった
あんなに心おどらせていたのに
いつまでもおどっていると思ったのに

そして色々なものがやって来て
そしてとおり過ぎる
それぞれの家へ帰って思い思い悲しむのさ
とてつもなくおろかで、とてつもなく美しい
そうさ、今日もこのいまいましいコントは続くのさ

Good night, boys& girls.

Good bye, Franky.

アブダカダブラ

アブダカダブラ！不思議な言葉

アブダカダブラ！魔法の言葉

道路は断ち切れちまってファウストは林檎の木の下で悪魔とお手玉遊びさ

アブダカダブラ！奇妙な言葉

アブダカダブラ！異国の言葉

断ち切られた道路の先でくだけた月と星が柔らかく絵のような街を照らすのさ

アブダカダブラ！おかしい言葉

アブダカダブラ！奇跡の言葉

そう僕はここに立てるよ風もない後援のブランコをひとりでに揺らしているのさ

アブダカダブラ！素敵な言葉

アブダカダブラ！魅惑の言葉

酒場のおやじが歌ってた麦酒と赤い葡萄酒の唄今は誰もうたうことのない哀しい唄さ

アブダカダブラ！今日から貴方も！

アブダカダブラ！今日から貴女も！！

ふるいぼえむ

夕日をはんぶんだけ食べた木曜日
風のないまちでぶらんこゆれている
きみが育てたポプラの木は
かもつ列車と昔ばなし

夕日をはんぶんだけ食べたかえり道
あてのない犬はしっぽで空ささえてる
きみが泣いてた駅前広場
こぼれた涙が宙返り

夕日をはんぶんだけ食べたひぐれ時
たよりない僕は石けって歩いてる
きみが待ってるさびたベンチが
秋が終わるとさびしげに

みどりいろの風は

みどりいろの風はもう吹かないのですか
ぼくが昔来たときはあんなに吹いていたのに
太陽でなないろに光ったビー玉や
川底に沈んでたおはじきもうないのですか
どんぐりの実を拾いに行った山すらも
あの納屋にすんでいたおじいさんも

誰もあそんでくれないよ

井戸に隠しておいたスイカもないのですか
スイカを隠しておいた井戸すら枯れたのですか
ぼくのいちばんお気に入りのあの木や
かかしも鳥たちもどこへ行ったのですか
お祭りのあとの燃え尽きた線香花火が
みずいろの空の下にあるだけで
誰もあそんでくれないよ

みどりいろの風はもう吹かないのですか
誰もあそんでくれないよ
ぼくはここに居るのにみんな何処なのですか
だれもあそんでくれないよ

ジンジャーエール・マン

ジンジャーエール・マンに会ったなら

僕は元気だと伝えておくれ

ジンジャーエール・マンは今もまだ

ジンジャーエールの海に溺れているのかい？

オレンジ・ジュース、ミックス・ジュース、カティ・サークにオリオン・ビール

ミネラル・ウォーター、カルピス・ウォーター、ミルク・セーキにレモン・スカッシュ

でもやつはいつだってジンジャー・エールをオーダーするのさ

たとえ苔むしてしわくちゃの爺さんになっても

ジンジャーエール・マンを見かけたら

一杯やろうと持ちかけてくれ

ジンジャーエール・マンは夢見てる

ショーガのかおりとふき出すあぶくを

ダイエット・コーラ、チェリー・コーラ、クリーム・ソーダにレモネード

ホット・チョコレート、ホット・ココア、ホット・ミルクにブレンド・コーヒー

でもやつはいつだってジンジャー・エールを愛しているのさ

やつのエピタフはもう決まり「スリー・チアーズ・フォー・シンジャー・エール」！

だれも知らない、やつはどこか

知りやしないよ、だれもね

ジンジャーエール・マンに会ったなら

雨上がりのドゥビ・ドゥビ

みんな帰った雨上がりの学校通りにひとり
街へすいこまれてった君の影を探して歩いてる
またぞろ泣き出しそうな空 たれこめた雲とにらめっこ
誰かが投げたボールひとつ 眠たげに横切ってた

何気無くて宙ぶらりんの僕は石蹴りあそび
窓から切り取ったようなフシギなひとときのなかで

ドゥビドゥビドゥバンバドゥビドゥバン、Can you want me ?
ドゥビドゥビドゥバンバドゥビドゥバン、Can you need me ?

ふりかえった くすんだビルで夕陽隠れてた
知らない間にホーキ乗ったマホウ使いが月を食べた
さびしさまぎらわすために犬が鳴いている
おわりそうでつづいていく哀しいほつれたつづれおり

どこにもありゃしない星くずの国を夢見ながら
カフェオレのなかで誰かのボエムを拾ってる

ドゥビドゥビドゥバンバドゥビドゥバン、Can you want me ?
ドゥビドゥビドゥバンバドゥビドゥバン、Can you need me ?

なんとなくくるおしくそして退屈な僕たち
チェシャ猫に笑われた気がしてフト天をあおいだ

ドゥビドゥビドゥバンバドゥビドゥバン、Can you want me ?
ドゥビドゥビドゥバンバドゥビドゥバン、Can you need me ?

リトル・ブルー・バード

リトル・ブルー・バード、歌っておくれよ昔のように
アングル・ロバートもいつかは必ず許してくれるから
Sing a song for me ?

リトル・ブルー・バード、歌っておくれよいつかのように
アングル・ロバートもいつかは必ずわかってくれるから
Sing a song for me ?

ブルースの歌

ブルースはボクサーだった
最後の試合はおれも見に行った
あまりにも長びいちまったので
客はみんな途中で帰っちゃった

J・F はコメディアンだった
バーのすみっこでひとり芝居をする
服からシミが消えたことはない
いつもリンゴを投げつけて

ジャックはいいやつだった
だから首をつっちまった
静かな葬式だった
小雨ふる中のお別れは

ジョニーは飲んだくれてた
酒で不満をごまかしていた
でも愛する女が死んだあとは
かれは酒さえ飲まなくなった

ブルースはベッドへ横たわって
笑ってシケモクに火をつけた
“ とどのつまり、おれたちは
なんにも手にできないのさ ”

故郷の町

棒になった足をまっすぐのばして
カーラジオのスイッチをいれよう

空虚な心を電飾の闇へ
今夜こそぬりこんでしまう

ウソとは何？ 真実とは？
道化がメイクを落とすところは？

老いがぼくを満たしてゆくと
去って行く人の背中を見て

あらかじめ決められた場所なのか？
それなら僕の人生とは何？
あらかじめ決められた場所なのか？
それなら僕の人生とは何？

ゴーストタウンの月

ゴーストタウンの真ん中で月を見る
あの月ぁキレイだなぁ、なんて素敵なんだ
ケンタッキーの月も、オクラホマの月も、
グランドキャニオンの月だって
おれが今眺めてる月と
おんなじなのさ

ガレキとこわれた中古車が街にあふれてる
折れた街路樹にもたれて座り ウィスキーをかたむける
おれが好きだった女も酒場も
歌もどこかへ消えてしまった
でもおれのなかにはしっかり残ってる
二度と消えはしない

おれが好きだった女のお気に入りの
あの歌はどんなだったけな
またあの歌を口ずさみたいよ
何十年も、何百年も

嘘

嘘

あなたの言ったことを信じて
ぴょこんと帽子をほうりなげ
まちの真ん中で
さかさまになってみた

誰かが慌ただしくぼくを抱えて
地下鉄の雑踏へ消えて行き

それはそれはきれいだな
ぐんぐんとまっ青な空気のなか
靴ももう意味がなくなって
おどけてぼくは鼻をかんでみる

それはそれはきれいだな
くるくるとはじけていく風船のようで

でも思うんだ だんだんと
ぼくがぼくじゃなくなっていくうちに
あなたはぼくに
うそをついたんじゃないかと

しゃつぽ

びいどろ細工のそらが
うみへとつながって
波を立ててゐます

明け方のへやのやうな
うす暗いコーヒーの味です

そつと机にひじをついて
窓にほつぺたを押し当ててゐます
ひたいに朝のつめたさがはりついて
アア、うでを垂直にのばしてみます
さうすれば波のむかうへ
素敵なものが見えさうで

明け方のへやのやうな
うす暗いコーヒーの味です
そしたらびいどろ細工のそらを
ゆつくりとぼくのしゃつぽが横切つて行きました

しゃつぽは行ってしまったので
ぼくは代りにおひさまをとつて
あたまにちょこんと載せました

今日も好い天気です

雨上がりの美術館の前で

サァ、顔を上げて空を見てごらん
重たげに垂れこめた、灰色の雲
街にしてはおかしなほど静かな街で
そと誰かの肩を抱き、鼻歌を歌う

いつかこの時もほこりをかぶって
思い出のクズカゴの下へおしこめられる
その中で君と誰かは肩を寄せたまま
永遠に青ざめつづけている

雨上がりの美術館の前で
雨上がりの美術館の前で

そっと鼻をつき合わせ、古風にキスをする
ふきだまった落ち葉はどこへ行くのだろう
形があればなくなり、見えないものはー？
そしていつか僕たちも落ち葉の行き着く先へと流れていく

雨上がりの美術館の前で
雨上がりの美術館の前で

街のシルエットを切り取った子供たちが
まだ老いも知らぬまま、くすんだ歩道を走る
僕も君もいつかきれいに消える、もし確かなものがあるとすれば、
僕や君のなかにある自分自身だけ

雨上がりの美術館の前で
雨上がりの美術館の前で

警告

心臓に手を当てて、死んでいることを確かめる
排水溝から漏れ出した通低音が
からっぼの空間をゆっくりと侵食していく
さあどんな気がする、こぼれ落ちた聖水が
血にかわって影といっしょに伸びていくのは？

絞首台に備えつけられた鐘が風に鳴り
食事の時間が告げられる
あなたは逃げられない、なぜならあなたの檻は
結局のところ概念上のものなのだからね

あなたはあなたを消す
新聞のクロスワード・パズルを解く要領で
自分を失ってしまえば、物事はただ過ぎるばかりで
あなたはただ乾いた大地の上に立ちつくしていればいい

もちろんシャバでは笑顔のゲームが続けられる
プラスチック製のチップ、ファシストによるルール
工場に整列させられたヒビだらけのビール瓶
もし僕がアナキズムの旗を高く高く掲げたなら
あなたはバラバラになってもくずと消えてしまうだろう

ただあなたはそれを感知しない
うすら笑いを浮かべているだけ
だから僕は鼻をひきちぎり
大都会のさびしいスモッグへのせてみる

ワサビツケ

朝焼けのむこうからどうでもいい一日が来た
かわり映えしないチョコ味のシリアル・コーンフレーク

きみに何かを伝えたくて ノートの切れはしにペンを走らせて
気がつけばへのへのもへじで それは一杯になっていた
真っ赤なバラのうそくささにきみはだまされちゃうかい
いっせーのーれでジャンプすれば飛べることを知ってるかい

携帯の画面しか見ていないきみをふりむかせたい
金も魅力もないぼくは空を飛んでいるのさ

甘ったれた胸の鼓動をワサビ漬けで中和させようか
たれもが不幸なふりをして 世界はほんとに不幸になった
万札も紙キレだってことに きみは気づいているのかい
きみが口にする愛ってものがどれだけ重たいか知ってるかい

荒波が来てまた波が来てでも僕は生きのびる
不器用に作られただれかさんの人生のなかで

甘ったれた心をワサビ漬けで中和させろ
つまらないエゴを捨てて思いっきり笑ってみろ
砕けずに当たりながら今日を生きってみろ
心にうそをつかずにだれかを愛してみろ

お夏ちゃん

きみは野に咲くお夏ちゃん、切ない吐息の般若ハラミツ
ハナもひっかけぬお夏ちゃん、アミーゴ！アミーゴ！こっち向いてくれ
夜ごとこの街やお祭りさわぎ、タコスの食いすぎ勝負時
あなたは どうしてお夏ちゃん、つれないしぐさのギャーテーギャーテー

アラマァ東京はサヨナラの街、かすんだビルヂングの涙
ハスキーボイスでセクシーレディが電話の向こうで酔いしれてひとり
．．．．．お夏ちゃん？

おっとそいつはお夏ちゃん、奇想天外、蝶々夫人
なぜだか知らねどエドッコ娘のアメリカ帰りのメリケン・チキン
今日もこの街やパーティー三昧 タコスも売り切れさァこれからよ
かしこみかしこみお夏ちゃん、アニマニマニのシレシャリテ！

アラマァ東京はサヨナラの街、かすんだビルヂングの涙
ハスキーボイスでセクシーレディが電話の向こうで酔いしれてひとり
．．．．．お夏ちゃん？

なんて素敵なお夏ちゃん、きみが笑えばなんでもオーライ
どうしてあなたは お夏ちゃん、プリーズテルミーユアフィーリング？
職安通いにゃあきあきしたよ 真夏の恋がしてみたい
さざ波にチョット誘われて だれもいないビーチで I love you

どうにかならぬかお夏ちゃん、ホーカス・ポーカスで出ておいで
ジャストチョット待てモーメント 流し目送ってサァ大変
今宵この街やちょい雨模様 お楽しみはまたおあづけかい？
いとしのいとしのお夏ちゃん、ヘニャニャヘンニャニャホイホイホイ！！

アラマァ東京はサヨナラの街、かすんだビルヂングの涙
ハスキーボイスでセクシーレディが電話の向こうで酔いしれてひとり
．．．．．お夏ちゃん？

なんて素敵なお夏ちゃん、きみが笑えばなんでもオーライ

どうしてあなたはお夏ちゃん、プリーズテルミーユアフィーリング？

職安通いにゃあきあきしたよ 真夏の恋がしてみたい

さざ波にチョット誘われて だれもないビーチで I love you

Oh , I love you ！！

ぎやまん小唄

ぎやまんにうつったきみだけを
見ているうちに日がくれた
坂みちを駆けてった野球少年
またそうやって今日が終わった

ぎやまん色のそらに星ひとつ
ぎやまん色のそらにぼくひとり
いつの日か きみとここへ
腰かけて語り合えたなら

こーひーのゆげにかくれてた
ぼくの大事なおとしもの
きみのことばと信じられない
ぼくをつらぬいたさだめの真実

ぎやまん色のそらに星ひとつ
ぎやまん色のそらにぼくひとり
いつの日か きみとここで
ふざけ合ってた そんな気がして

ぎやまん色のそらに星ひとつ
ぎやまん色のそらにぼくひとり
いつの日か ぼくはここで
きみのためのうたを書くだろう

Flower City Pops

からっぽのジョッキの底に
はりついた春の花びら
宿酔でゆれる酒場
街角のハトの声

Flower City Pops

Flower City Pops

なぜぼくはきみの手をとって
花をつみに行かないのだろう
なぜきみはぼくに手を引かれ
花をつみに行かないのだろう

Flower City Pops

Flower City Pops

そしてもし太陽がぼくを照らし
雲の切れ目が見えたら
道ばたでしおれちまった
誰かの姿に泣くだろう

Flower City Pops

Flower City Pops

秋のあぱーと

夏のきれっぱしについたマヨネーズ
秋のあぱーとをぬりかえて行くよ
電車通りのすすきたちが
さびた街を背にゆれているよ

夕涼みにしちゃはださむくてさ

れんが色に終わってった
空をすこし水筒に入れて
テーブルクロスはきつね色
きみの影が映っているよ

つるべおとしで日が暮れた

個人主義

ぼくはカッコよく生きたくない
ぼくは好きかってに生きていたい
ぼくはカッコよく生きられない
ぼくは好きかってにしかできないから

王子さまの運んでくる幸せは
ただの退屈なものばかり
お姫さまが勝ちとる幸せは
単につまらないつくりごと

ぼくは愛されないかもしれない
ぼくはなにをたよってるんだろ
それはぼくを動かすぼく自身さ
それがぼくにとって明日を見つけること

OLD ROCK SINGER (夢に追われたロック・バンド)

もうだれも憶えてないからこの歌を歌おう
もうだれも歌わないこのたいくつな歌を
ラヂオは壊れてもうしゃべらない
町はさびれてだれも通らない

もうだれもノらないからこの曲で踊ろう
もうだれも踊らないこの古くさい曲で
ビートはかぼそく聞こえない
あのダンスホール今はもうない

夢に追われたロック・バンドの
だれかの名を呼ぶかすれたうら声の中で
今なら泣かずに歌える歌を
もうひびかないしわがれた声で

いつまでたっても歌っていよう

わたしの町

この古ぼけたおちば道をとぼとぼ歩いてゆく
だれかをのせた茶色の車が夕日を追ってゆく
カンカンとふみきりの声がかすかな汽笛に溶けてゆく
この古ぼけたおちば道のむこうにわたしの町があった

まるで小さなキャンバスに詩人（うたびと）が描いたような夕ぐれ

ほんのりとみかんのかおりの子どもたちが駆けてゆく
つぎあてだらけの学生服のなかへ首をすくめてみる
きまぐれないわしぐもをだいたい色に夕日が染める
だいたい色にぬられてたわたしが帰る町があった

もういまはありやしない風が描かれてたわたしのキャンバス

きみの知らないわたしの町が
わたしを過ぎたあのちいさな町が
きみの知らないとおいわたしの町が
わたしが帰るはずのあのちっぽけな町

あいすくりーむ

まるでそれはあいすくりーむのような空だったので
わたしは銀いろのすぷーんをとって
そっとひとすくいしました

とても古風な
ゆきのいろの街です

毛布をかぶったまま
やりすごしたい朝です

そでぐちがほつれた
ひゃくえんのせーたーです

すとーぶのにおいのさむいへやに
まあたらしい日がさしこんで

ふと気がつけば空はみるくでいっぱいだったので
わたしは銀いろのこっぷをとって
そっとひとすくいしました

そば

どこからかそばを届けに来る
のびためんが夕日に浮かぶ
どこからか器をとりにくる
底には少しねぎが残って

道でころんだ小さな子どもの
なきごえがきこえる

ですからわたくしは
そのどことなく薄暗いそばを
全部食べることが
できなかったのです

パリのびんぼう街

パリのびんぼう街で
おどりこの君と詩人のぼくは
うたをとかしこんだスーブのんで
冬をごまかしていた

パリのびんぼう街で
きずのついたシャンソンのレコード
あきても同じ文句くりかえして
コーヒーも湯気たてなくなった

けしょうする君はなぜだが
けだかい人に見えた

パリのびんぼう街で
とつぜんにふりだした雨
もう君はどこかへ行ったので
ぼくはひとりでぼろコートを使った

けしょうする君はなぜだが
けだかい人に見えた

りんごの木

雪のしたにかくれてたりんごの木の下を
そっとふるさとの風が吹いていきました
いやなことばかりの冬のさなまに
しらないまちの風が吹いていきました

なんにもできないままに古びていく季節で
立ちつくしたまま流れてきたゆきどまり
どうにもならなくて逃げだそうとして
きびすをかえして背をむけたこの町です

とぎれなくつづいていく朝の町のくるまは
よごれた雪をのこしてゆきます
いまぼくは奇跡のなかへ立っている
ひかりのなかへたった一人 たったひとりで

雪のしたにかくれてたりんごの木の下を
ふるさとの風をしょって歩いていくのです
神さまが死んでしまったはずの
この世界のまん中で神さまと話すんです

しあわせな国

どこまでも続くいなかみちをぼくは一人歩いてゆく
いつか歩いたはずのみちをぼくはどこかへ歩いていく
ぼくをとおりすぎる風のこえずっと忘れずにいたい
ぼくのうえへ広がる空ずっと見上げていきたいのさ
あなたの笑顔がどこかにあるはずの
こんなにも広い世界の中で

いつまでも続くものがたりをぼくは一人生きてゆく
石のかべにかかれてただれかの落書きをたどってゆく
ぼくを生んだ大地のころずっと抱きしめていたい
ぼくのうえでひるがえる光みんなに幸あれ
あなたがいつかどこかにあるはずの
幸せを手にしてほほえむように

鉄琴の唄

鉄琴の唄が村はずれへと流れてく
さかな釣りから帰る途中に聞こえてた
鈴のような虫の音のようなあの唄が
ものうげな夕ぐれへのびる影へととけてった

家をなくしたおいらが帰ってくるのは何処だろか
泣きたいはずの宵やみになぜだが楽しいような気分で

びくのなかで夢をみている秋の風
ゆっくりゆられて流されてくよな浮き舟は
遠くとおくで海とるながらる川の上
すすきがささえてるきつね色した空の下

家をなくしたおいらにも聞こえてきた鉄琴の唄
誰もいないはずのあぜ道でおいらの歌声へ重なるだれかの唄

おいらの歌声へ重なるだれかの唄

ジョンのはなし

昔ぼくの家には ジョンという犬がいたらしい
どこからともなくとぼとぼやって来て
家の者が水を与えても飲まなかった
が、水皿にミルクをなみなみ入れてやると
ぴちゃぴちゃとそいつをカラッポにした

父さんがまだ高校生だった頃
学校へ行く父さんに途中までついてきて
そのままどこかへ行ってしまう
でも三日後にちゃんと戻ってきた
という話をかつて祖母がしていた

ジョンはある日 縁の下で丸まっていて
ずっと丸まっていたので
どうしたのかなと見てみると
ひっそりと冷たくなっていたという

その前の日は何かのお祝いで
ジョンもたらふくごちそうの残りを食べたという
だからジョンは死ぬ時もかなしくなかったでしょうよと
母は言った

水平線

水平線へ沈んでみたい
大きなマッカな夕日といっしょに
こわれた船のかけらを拾って
ふるさとも見えない海で

冬山の中へ消えてみたい
通信を断った飛行機に抱かれて
空が終わるところへ溶けこむ
ふるさとも遠い山で

そうして僕が消えるその瞬間
僕はどんな気持ちなのかな
気持ちすらなくなった後
どんな気分になるのかな

そうして僕はどこかへ立ったまま
僕が消えてしまうところを見てみたいんだ

水平線へ沈んでみたい
僕は泣いたりなんかしないよ
なみだを混ぜるには海は大きすぎるし
水のつめたさも感じやしないから

城下

青くてなにもない夏空のひかりが
静けさの裏にはりついた町影をゆらす
ぼくの吐き出した重たい空気が
ステンドグラスにさえぎられて

こげくさいコーヒ一杯分の時間が
動かないブロンズの人形たちをすりぬける
さびしいとかかなしいとかそんな心の色じゃなくて
どこまでも透明に広がる

えかきが描いたぼくの横顔が
赤茶けたカンバスの中へ浮かぶ
夕ぐれまでまだ遠い
城下の昼下がりに

君からもらったひとときの白いパンを
からっぽなひだまりでかじってみる
とめどなくあふれるはずの涙は
せみの声といっしょに消えてった

詩人が詠んだかつてのぼくが
いまのぼくと重なり合う
やるせないほどに美しい
城下の昼下がりに

ヒゲをそっている

第四放送ロックンロールの時間

時速200キロのものすごいスピードで
歯のぬけおちた老婆が走ってゆく
ふみ荒らされたお花ばたけに
ばたばた兵士が死んでった

ロックンロールで踊れ
あの曲で歌え

差し出し人が案山子の督促状
わいては蒸発するわき水さ
ぐちゃぐちゃにぬりたくったまちの空へ
おいらはABCを描きまくる

ロックンロールで叫べ
あの曲を演れ

かなしかなしや子どもたち
おやのうそでマッカな空の下
ちゃんわんいっぱいのコカコーラで
生きる寸法をはかっていたっけ

ロックンロールで舞え
あの曲で跳べ

あなたの近くにポストがあればひとまず

カンバンに書かれた文句は
「ふるいじてんしゃ売ります
じぜんなべのおまけつきです」

というわけで並んでいたさんにんは
いつしかよにん、ごにん、ろくにんになって
あふれ出るプロテスト・ソングに
町はお祭りもよう

革命だ！革命だ
晴れのちくもりそして鳩
ピストルのなかへ詰まってた
ビール瓶じいさんに聞いてみな
聞いてみな、坊や
聞いてみな、ハニー
行き先は地図のうへにはない
恋愛はおそろしくルサンチマンでいっぱいさ

そしてもしその気があれば
10円切手を200枚はって
僕に手紙をください
あて先はあなたの好きなように
書きなさい
僕はどうも
みそ汁作りに手間どりすぎて
いるよう
です

オールナイト・ゲーマー

太陽が沈めばみんなやって来る　才気のあふれた子どもたち
夜の盃はにぎやかに街を　星に変わってぬりあげる
(オールナイト・ゲーマー)

太陽が沈めばテーブルの上　ポーカーフェイスが並べられる
今夜だけ愛するおんなを探して　カクテルとジョークでいちごっこする
(オールナイト・ゲーマー)

流行りの歌も知らない僕は　ウヰスキー片手にあざけり笑いサ
くちはてたモートルのかべによっかかって　ゲームの行方に舌打ちする
(オールナイト・ゲーマー)

太陽が沈めばゲームが始まる　才気のあふれた子どもたち
とびかうマニーとフレンチキスの　間でお月サマも酔いしれた
(オールナイト・ゲーマー)

気をつける　あんたのとなりにあんたをねらってる奴がいるぞ！
やるかやられるか斬るか斬られるかの世界サ
いつはてるともなくつづく夜に　いつ終わるかもわからずにゲームは続く
(オールナイト・ゲーマー)
(オールナイト・ベガー)

雨の朝

夜が白んで朝になっても
つきっぱなしの僕のほおづえ
開いた花の重みを抱えて
窓ぎわにうなだれる百合の花
まちを映す雨のつづてが
ガラスにヒコーキ雲を描いた
回るカサとつけっぱなしの
くるまのライトに照らし出されて

雨の朝 つらかないけどやりきれない
つらかないけどやりきれない
雨の朝 つらかないけどやりきれない
つらかないけどやりきれない

起きてたつもりが寝ていたようで
とぎれた心の糸が哀しい
女の子たちの白い吐息が
表通りの寒さをつげる
昨日の夜から飲みさしの
なみだのようなコーヒーが一杯
すっぱいだけの後味が広がる
くるまのひいた水がはね上がって

雨の朝 つらかないけどやりきれない
つらかないけどやりきれない
雨の朝 つらかないけどやりきれない
つらかないけどやりきれない

駅前ささやき

駅前 ささやき 横顔 すぎゆく

駅前 道行 今日を おき去る

流れてた川はもううずもれて水音一ツしないけれど
あたたかな灯火をともらせて家路を急ぐ環状線
赤い屋根、青い屋根、ふるさとよりも見なれた景色
でも誰が住んでいるのかわからない家々

幻 ふりかえる 何にも 無かった
夢から さめてみた 何にも 無かった

雪になりそうな雨ツブがスーパーマーケットの屋根に泣く
水しぶきを上げながら街ゆく人と忘れられた時代が交差する
いつかは飛べたかもしれない空今は都市のタメ息にかすんで
イタズラにくもの切れ間から底の無い空が見えた

街のなか 立ちつくして 来ない人を 探した
はかなく 終わって やるせなさ だけがのこる

駅前 ささやき 横顔 すぎゆく

駅前 道行 今日を おき去る

僕がはだしで歩くのは

僕がはだしで歩くのは
ぴったりのくつがないからで
僕が寝床にしているのは
街の風が行き着く路地

僕がこうして歌っているのは
人と季節と空気の歌
僕がここまで生きて来られたのは
夕やけや月があったから

汚れた水で洗った今日を
昨日の空へ干すなんて
僕を見て、手をとって
この歌をここできいてくれ

僕が歩いてゆく道は
山と河がとけ合う場所
僕が骨をうずめるところは
僕が帰ってゆくところ

僕がはだしで歩くのは
ぴったりのくつがないからで
僕が寝床にしているのは
街の風が行き着く路地

汚れた水で洗った今日を
昨日の空へ干すなんて
僕を見て、手をとって
この歌をここできいてくれ

風のようなおいら

風のようなおいらだから 行き先なぞない
ただ今日があって そして明日がある
風のようなおいらだから どうでもいい奴
でもそれはとりたてて 悲しむことじゃない

犬のようなおいらだから 月夜に吠えている
どこかでおまえが 聞いているかもしれないから
犬のようなおいらだから いつも腹ぺこさ
夜が明けたらまた 食べものを探しに行くのかァ

あほのようなおいらだから へたくそにしか愛せない
こんなにもこがれて ボロボロになってゆく
あほのようなおいらだから 不器用にしか生きられない
へらへらと笑って いえた傷を見つめる

風のようなおいらだから 誰も覚えていない
どこへともなく ただ歩み去ってく
風のようなおいらだから すぐに消えちまう
でもそれはとりたてて 悲しむことじゃないよ

いまは

いつか僕がつけた足跡は
雨に流れて行っちゃったけど
いつか僕が歩いた道は
雨にぬれながら続いている

いつか僕を泣かせた歌は
とうに忘れてしまったけれど
いつか誰かを泣かせたくて
僕は歌い続けている

どこから来たのかどこへ行くのか
どこで終わって忘れられるのか
ただ、今見えているものは
たとえば雲や夕ぐれや・・・

何をするためここにいるのか
誰を想って歩いてゆくのか
ただ、今見えているものは
たとえば 雲や夕ぐれや
 月や星や子どもたちや
 風にたなびく枯れすすきや
 僕の手や君の影や

ワンデイ

ヒゲをそっている 毎朝のことさ
コーヒーを入れてる 毎朝のことさ
ワンデイ、ワンデイ、アイラブユー！

君に会いに行く 昼下がりの街
君を迎えにゆく 夕ぐれの旅路
ワンデイ、ワンデイ、アイラブユー！

風呂にまでひびいてる フランク・ザッパのうた
ベッドにとび乗って ある日が遠ざかる
ワンデイ、ワンデイ、アイラブユー！

今宵もひとり飲み明かす

願い

あたたかいスープがほしい　ひときれのパンがほしい
だれかがぼくの名を呼ぶ声を聞きたい
灯火がほしい　屋根がほしい
さしのべたこの手をにぎりしめてほしい

それがぼくの願い

もしまちがっているのなら早く言ってくれ
つかれはてた戦いはもう千年もつづいている
まっくらやみでこの道すら見えず
きみのぬくもりを思い浮かべているだけ

それがぼくの願い

どこかへとつづくこの長い道
どこにもつづいていないかもしれない
曲がりくねった道　いつかはわからないけれども
どこかにたどりつけたら　足跡をのこせたら

それがぼくの願い

さよならの芝居

「さよなら」を言うためだけにおれはここへ来た
「こんにちは」じゃなくて「さよなら」を言うために
きみがおれのうでの中からこぼれ落ちてゆく
時の重みに耐えかねてこぼれ落ちてゆく

「さよなら」を言うためだけにおれは命がけさ
「ありがとう」なんて言ってもいられない
シェークスピアならどう幕を下ろすだろう
シェークスピアだったらこのちっぽけな芝居のおわりを

「さよなら」を言うためだけにおれはここへ来た
もう二度と来ないはずのきみのところへね
幕を下ろしに着たんだ ドリンクも売り切れ
気をつけて帰ろう もう芝居はおわり

「さよなら」を言うためだけに

トランク

ぼくがどこに立っているのか
そして何を持っているのか
駅で拾った
駅のかたすみに転がっていたそれを
誰だか知らないけれど
もうここには居ない人が落とした
あるいは捨てたそれを
からっぽのトランクへかき集めて

そうやって少しずつ
トランクを重たくしていく

けれどもトランクはまだまだ軽くて
それはぼくを苛立たせる
戸惑わせる
このぼろぐつじゃア
足跡をつけても
砂ぼこりにすぐに消されるし
飲んだ酒もあくる日にはぬけている
とどのつまり
ぼくに出来ることは
なるべく時計に目をやらず
また
トランクを重たくしていくだけ
少しずつではあるけれども
それは
ただひとつだけの
こことぼくをつなぎとめているもので
それ以外のなにものでもない
と
思う

老いぼれアイリス

アイリスはそっち側へいて
ウィスキーをなめていた
紅茶にちょっと
ウィスキーをたらすのさ
砂ぼこりがまちを走って行って
太陽が雲のうらへへばりついた
アイリスはいう
くたばっちまえ！
くるまにひかれた蛙みたいに
そしてまたアイリスは
汚いべろをひらひらさせて
ウィスキーをなめる
ウィスキーを紅茶にたらして
そしてぴちゃぴちゃ
紅茶をのむ
ああそうさ
アイリスはみじめな老いぼれさ
アイリスは哀れなのんだくれさ
ちょうど今日みたいな日
やけに冷えこんだ夕ぐれ時
アイリスはそっち側へいて
ウィスキーをなめていた
どこかでゼンソクの犬がいなくて
それはとても
やりきれない光景だった
あんなに
やりきれない時間は
そうそうあるもんじゃないよ

今宵もひとり飲み明かす

今宵もひとり飲み明かす やりきれなさに飲み明かす
のれんのうらにはりついた 誰かの咳を眺めつつ
流す涙は枯れきって 話す相手もおらぬまま
今宵もおれは飲み明かす 飲まれて今日もねむるだけ

今宵もひとり飲み明かす 遠くに電車が走ってる
おれもいつかは走ってた 行く当てもなく急いでた
けれどどこまで来たのかと おれはどこまで来たのかと
おれはどこへと行くのかと いつしかおれは行き止まり

そんなくだらぬことなぞは お茶でにごして飲んじまえ
かしこい人らはそう言った そしてかしこく生きていた
けれどおれには出来ぬこと にごしたお茶は飲めないや
それじゃ何にも片付かず ただ胃ブクロが痛むだけ

だからおれは酔いしれて つぶれて吐いてまたつぶれ
汚い街の路地裏で 肩をふるわせ吐いていた
肩をふるわせ泣くかわり 肩をふるわせ吐いていた
お茶をにごして飲むかわり つぶれて吐いて生きていた

今宵もひとり飲み明かす やりきれなさに飲み明かす
ぬぐう涙に用はない にごしたお茶に夢もない
肩をふるわせおれは吐く 吐いてつぶれて雑魚寝する
そのうち新たな朝が来て おれはゆっくり歩き出す

ちゅうおう口のきおすく

アイスクリームのふたは退屈な色がした
しばれた指先も退屈そうだ
きのうの夢は想いだせそうに無い
あたまの中がよく見えないのです

ぼくはどこへ立って居るんだろう
こんな、こんなにしばれたまぬけ

女の子がすたすた歩いてゆく
家へと帰るのだろうか
遠いとおい家なのだろうか
すたすたふり返らず行ってしまうのです

ぼくはどこへ立って居るんだろう
こんな、こんなに人がたくさん

ぼくは、どこへ立って居るんだろう
こんな、こんなにしばれたまぬけ
ぼくは、どこへ立って居るんだろう
こんな、こんなに人がたくさん

あたまの中がよく見えないのです

希望の音楽

きみのためにだけうたいたいのさ（嘘）

夜のまちなかでオンガクする
汚れた空を抱きしめて
ヘッドライトがまぶしすぎて
きみのかおつきが読めなかった

もうわかんないよ、ただぼくは
花が散るのを眺めてた
もうわかんないよ、花びらが舞い
ぼくのまわりを吹き荒れた

きみのためにだけうたいたいのさ（嘘）

さびしい時代にラクガキする
きみの背中でギターを弾こう
そのうち溶けてさよならさ
十六の春に影さして

もうわかんないよ、ただぼくは
光りをひとり見つめてた
もうわかんないよ、大きな光りが
ぼくたちみんなに降り注いだ

きみのためにだけうたいたいのさ（嘘）

夜のまちなかでぼくはオンガク
汚れた空を飛びながら
十六の春は来なかった
きみは今夜も飛べなかった

もうわかんないよ、ただぼくは
こころがふるえているのを感じてた

もうわかんないよ、ただぼくは
奇跡が起こるのを待っていた

きみのためにだけうたいたいのさ（嘘）

アイスクリーム・ブルースマン

アイスクリーム・ブルースマン？アイスクリーム・ブルースマン！
ひとつも売れずに
家へ帰れば
腹の虫けらは
騒ぎ出すだろう

アイスクリーム・ブルースマン！アイスクリーム・ゴッドブレス！
アイスクリーム・シャイン！アイスクリーム・ドリーム！

アイスクリーム・ブルースマン？アイスクリーム・ブルースマン！
神に捨てられて
なみだをぬぐうための
そですら持たずに
どこへ行くんだ？

アイスクリーム・ブルースマン！アイスクリーム・ゴッドブレス！
アイスクリーム・シャイン！アイスクリーム・ドリーム！

現代日本

見るからにブサイクな女の子が
カガミをのぞきこんで思案顔
どのアングルがベストに美しい？
どうすれば男をダメせるの？

泣きはらした無職男が
社会のセコさを空に叫んでる
殺したアリの上へポタポタ
煮えたぎったなみだこぼれてる

知るか、おれにやわからねえ
いつもぐるぐる、同じとこさ
うまく逃げたと思ったら
フクロの中にいるままなのさ

見るからにブサイクな女の子が
雑踏の中へ去っていった
マッカッカな太陽が
血を吐いて笑ってたさ、いつまでも

知るか、おらにやわからねえ
おれはどこまでも貧しい
貧しさは金じゃなくて
おれの中にあるものなんだ

歌の畠

ユア・バンド？

時にはハイになる 時にはローになる
時には何にも考えられなくて
だれかに電話をかけるけど
だれも出ないでそんな風におわり

時にはゴキゲンで 時にはフキゲンで
やりすごした日々がつもってく
ほこりのようにつもってく
きみのバンドがビートをきざんでる間に

時にはハイになる 時にはローになる
時には何にも考えられなくて
かなしい目をした羊飼
アメリカがえりを気取ってるきみのバンド

ボスに紙ッキレをもらって、列に並びな

今いちわからないことだらけで
だれも教えて呉れないから
名前を付けられそこねた犬に
ホネの一本すらやれやしない

ヴェジタブル、ニュートラル
オートミールに混ぜては食べてる文字の読めない地図

しぼれるだけしぼられたまま
捨てられたレモンは泣くに泣けずに
ボスが配ってる紙切れを手に
いくらかゼニをもらいに行こう
ブルー・ギル、ショーユ・ダル
ジェスロ・タルのギグにも行けない暦のない週末

首をひねっていつか見てた
暮れなずむ街は見えやしない
名前を付けられそこねた犬から
ホネを奪って生きてゆく

ロックン・ロール、バルタザアル
ナッシュ・ビルははるか遠くに
おれはどこにいる？

百万年

百万年間 きみを待っていた
一度枯れた花が再び咲けるまで
百万年間 きみを待っていた
宇宙とこの星の軌道が重なるまで

百万年ぶりの歌がハーモニーを求めてる
刻まれるのは歴史とそれからビート ぼくのビート

きみは恋してた けれどぼくにじゃなかった
雨上がりの街に消えて行ったろ？
百万年間に一度のせつなだけど
ひとの心だけはどうにもならなくて

百万年ぶりの歌が弧を描いて響いてく
奏でられる音は楽譜に書かれてるとはかぎらない

お幸せに きみは結ばれた
チャペルの音の中 ぼくから去ってった
そしてぼくは歌を忘れちゃった
また百万年 待ち続けられないとな

夏休礼賛

咲き乱れるハイビスカス ハイビスカス髪にさして
毒をかくして笑いかけてる きみはちょっとおそろしい
なにか楽しいことあるのかい アセにまみれた夏のまち
カトリせんこうもせんぷうきも いつの間にか目を回して

そんなわけできみのいえに遊びに来たわけなんです
そんなわけできみのいえでアイ스티ー飲んでいるんです

虫とり少年の声がして まだまだ沈みそうにない太陽
セミのにげた空にむかって かけだしたら とても愉快！
いなか帰りのひと乗せて ガタガタ電車走るまち
電車とおりすぎたあとで 田んぼの中を風吹きぬけて

そんなわけできみのひざをまくらがわりにしてるんです
そんなわけできみのはなしをこもり唄にしてるんです

マントラ

きみにたりないもの　ぼくが持っている
ぼくにたりないもの　きみが持っている
きみがほしいもの　ぼくは持ってない
ぼくが受けとるもの　きみは渡さない

また夏が来る　それがすべてのマントラ

きみの学ぶこと　他愛のないことさ
ぼくの歌うこと　もっと阿呆らしい
きみが得るものは売りものばかり
わずかなぜ二を払うこと　それだけのきみさ

また夏が来る　それがすべてのマントラ

きみがほしがってた　あれやこれや
それはきみが得られぬものだった
その上きみに必要ないものだった
いまとなっては　どうでもいいけれど

また夏が来る　それがすべてのマントラ

ポエム・イン・ザ・パーク

かの女がやって来る ペンキを持って
おおきなカベに塗りたくるつもり
噴水をかこんで ダンスを続けてる
バロウズ、ギンズバーグ、ケルアックを連れて

もしぼくがバットだったらホームランは打てやしないだろう
スネ毛がはやく伸びすぎて 走ることも出来ずじまいさ！

かの女がささやいた 「どっか行きましょうよ」
トロトロとろけさせる 琥珀色の肌
しかし彼女の詩（死）はとっくに終わった
いまそこに立っているのはぬけがらだ！

もしぼくがお金だったら ドブに落っこちるだろうな
そしたらぼくは一個のリンゴとも取引き出来ないのさ！

キャンベルスープを二百個並べて
ピアノを一回だけたたいてみよう
そしたら少し気分も晴れるだろう
いや、わからないね - ここが何処なのか

もしぼくが別のものだったら かの女の中にとびこんでいる
しかしぼくはぼくでしかない しかもそれもあやふやときてる

やぎさん郵便に寄せて

やぎさん郵便に寄せて

白やぎさんと黒やぎさんは今でもどこかで
セッセと手がみをやりとりしているのでしょうか

そして僕はずいぶんと
とおくへ来た気がします
けれども僕はそのまんま
何一つ変わっていない気がします

せっかくもらった手がみを僕は
食べてしまいました
僕が書いた手がみもまた あなたに
食べられて無くなってしまうのです

だから何も残らない

しかし

それでいいんだと近ごろ思うようになりました

僕はあなたの幸せをねがいます
くわえて、自分の幸せもねがいます
何故だかそうしていると
もしあなたがほんとうに幸せになれば
僕もいっしょに幸せになれる気がするんです

それがいつになるかわかりませんが
その時まで歌っていきましょう